狸のうしろ姿

妙の光（たえのひかり）

通刊53号 **復刊32号**
2000年12月20日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

狸

妙光寺前の国道四〇二号線には〝動物注意〟の標識があって、兎と狸が描かれている。確かに多い。先日も境内の墓地で子連れ狸の親子を見かけた。ずんぐりした体で歩く姿はとても愛嬌がある。

以前今の墓地がまだ畑でスイカを作っていたころ、熟して明日収穫しようと思うのが翌朝には何者かに食べられてしまう事件が続いた。作っていた農家の人は「ムジナの仕業だ」と怒っていた。

また何年か前のひと冬、夜ごと住職の部屋の外に現れた。饅頭や果物を置いて餌付けを試みたが、犬がいたせいか成功しなかった。

ちなみにムジナとは狸をさす方言ということになっている。でもそういう動物が他にいて、人間をだますと考えている人もこの地方には多い。なんとも不思議で楽しい気がする。

比叡山参拝の記

小川英爾

十一月末、紅葉が盛りの比叡山延暦寺に行ってきた。伝教大師最澄が開かれた天台宗の寺だ。日蓮聖人はじめ鎌倉時代に各宗派を起した僧が皆ここで修行したので、日本仏教の母なる寺とも呼ばれるという。これまで二度お参りしたことがある。でもいずれも短時間で、ゆっくり訪ねてみたいと前々から考えていた。それが今回、天台宗の僧侶の研修会に講師として招いていただいた。

天台宗は日本でも古い宗派のひとつだが、お寺も僧侶の数も我が日蓮宗の半数と決して大きくはない。この日全国から集まった方達も六十人と少なめながら、それだけに一泊二日の研修はじっくり話し合えるとてもいい雰囲気だった。

家族が大きく変化している現代社会で、これからのお寺のあり方がテーマ。「お経が漢文のままであまりに一般に分かりにくい。もっと身近なものにして、感動が伝わる話をしなければ」と司会役がまとめると、もうひとりの講師で社会福祉の活動家が「そんな抽象的なことでなく、お坊さんは世間一般の人と同じ視点を忘れずに行動して欲しい」と注文をつけた。京都市の町内で一人暮らしの高齢者の生活を支え、子供たちを集めて交流の場を作り、景観を壊すマンション建設の規模を縮小させたうえその住人を町内会に引き入れた。この方の活動実績のまえに、私も含めて出席の僧侶は皆たじたじだった。

朝のお勤めは伝教大師のお墓がある浄土院でする予定だった。しかし雨で移動ができず、宿舎の延暦

寺会館から近い根本中堂になった。浄土院でお墓を守る修行僧は今も厳しく戒律を守り、十二年間は山を下りれないという。厳しい比叡山の修行は他に〝千日回峰行〟が知られている。これは七年間に分けて合計千日間、ときには毎日六十キロの山道を二百日歩き、さらに九日間の断食、断水、不眠、不臥といった修行を続けるもので、戦後これを達成した僧は数えるほどしかいないという。

広大な比叡山に百二十あまりあるというお堂の数々、その中心をなすのが根本中堂。そこでの朝の法要は以外に簡素な感じだった。身延山ならゆうに五十人以上の僧侶で読経するが、三人ほどの声しか聞こえてこない。参拝者も我々研修会の関係者以外には二十人ほどの団体だけ。改めて尋ねる機会はなかったが、参拝客は以前に比べてめっきり減っていると耳にした。それでも暗い堂内に千二百年絶えずに燃え続ける火〝不滅の法灯〟を目の当りに拝み、歴史の重みを実感させられた。その根本中堂の作りが、正面で靴を脱いで回廊をぐるっと回って中の庭を眺めながらお堂に入る形だ。建設中の妙光寺の新本堂と同じことに改めて気がつき、なんとなくうれしかった。

会場を辞した後、荷物を預けて東塔、西塔、横川と三つに分かれる山内を歩いて巡ることにした。「全部を丁寧に回ると一週間はかかりますよ」半分冗談で言われたが、なるほど主要なお堂だけ、急ぎ足で参って歩いて四時間かかった。それも千日回峰行で歩くコースだからすべて山道。下り道だけを教えてもらったからまだ楽だったが、確かに数日は要りそうだ。

比叡山は〝寒湿論貧〟の山とも聞かされた。標高八百メートルあるから寒い。ま下の琵琶湖から水蒸気が昇るから湿気が多い。そこで僧侶が毎日修行で論を交わしている。昔は歩いてしか登れないから参拝者が少なく、貧乏な寺、ということだそうだ。

しかし今はケーブルカーに有料ドライブウエーもりっぱにできて、山頂には遊園地まである。一部では千日回峰行の山道のすぐ脇をりっぱな車道が通り、大型観光バスが走る。神聖さと俗っぽさが隣り合わせだ。千二百年の伝統とはいえ、時代の変化と無縁ではいられない。そんな現代の寺のありように、前日の研修会での議論や妙光寺の立場を重ねあわせながら、修行僧が通る道を歩いた。

山の尾根道を行く途中、視界が開けて京都市内と、逆方向には琵琶湖が見おろせる絶好の所に出た。〝玉体杉〟と案内板がある杉の大木も立っている。「修行僧が御所に向かって天皇の安泰を祈った場所」とも記されている。私はここに立ち、京都の人々の暮らしも琵琶湖の景色も千年の間に大きく変わった。でもこの山の上からの眺めは小さな変化が見えないから、大きな風景はさほど変わっていないのではないか。山に籠もり山から眺めることは、目先の変化に惑わされないことでもあるなあ、などと改めて思ったことを恥ずかしながら正直に告白する。

最後に奥比叡と呼ばれる横川の定光院にたどり着いた。日蓮聖人がこの地に学ばれた際住まわれた地で、日蓮宗の手で近年お堂が整備された。奥まっているせいかここまでは観光客の足も及ばず、ひと気のしない静寂さにふと寂しさを感じた。しかしひとり堂内で読経し外に出たとき、この静寂に言い知れぬ安らぎを覚えた。

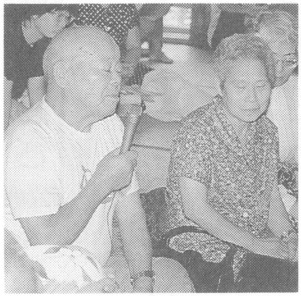
日頃運動不足の体に山道はきつかった。ガクガクの足を引きずってバスに乗り込み、比叡山を後にした。降りた京の町は紅葉シーズンのため観光客でごったがえし、宿も取れない。そんなことは思いもつかなかったほど、比叡山は静かだった。

信心

三千ヶ寺巡拝

横浜市　土佐興四治（83才）さん
　　吉枝（79才）さん

土佐さん夫妻は新潟市の生まれ。終戦で外地から引き上げてきたものの職が無く、戦友の誘いで当時まだ幼い長女を伴い横浜に出た。竿竹売り、甘酒売りから悪いこと以外なんでも、夜昼なく働いた。幸い知人の材木屋の運転手に採用されたが、そのころ娘さんのために作った子供の籐椅子が家具屋の目に留まり、夜は椅子を作って寝ずに働いたこともあった。



やがて落ち着いて材木屋の社宅に暮らし、三人の娘さんも皆嫁いで夫婦二人の生活に。六十才を過ぎたある日、新聞に紹介された巡礼の旅が目についた。「戦争で亡くなった人たちの供養のために、休日を使って自分も歩いてみよう」と思いたつ。

最初は列車とバスを使ったが、一人では泊めてもらえないし金もかかる。そこで寺の軒先や野宿をして、食事は乾パンという旅を続けた。やがて足が不自由になったこともあり、軽自動車を買って奥さんとの二人旅になった。今でも食事は乾パン、宿は車の中を続けている。

毎年春と夏に旅に出て、二十年余りで四国八十八カ所は十五回。他にも津軽、山形、坂東、西国等々各地の札所を巡り、日蓮宗は身延山、千葉小湊誕生寺、佐渡と何回もお参りした。納経帳に書かれた寺の数は三千を越している。「あるとき夜中に車を覗く人影を妻が見つけたんです。よく見るとそれは交通事故で亡くなった兄とその子供の顔でした。不思議な体験はたくさんあります。でも本当に楽しかった。」

妙光寺には平成三年に安穏廟を求めて以来十年、二人で毎夏のフェスティバルは欠かしたことがない。それ以外も春などに足を運んでいる。

ところが平成十年の春以降奥さんの痴呆が進み、今は土佐さんのかける言葉すら通じなくなった。食事から一切の世話を土佐さんがする日々だ。「旅の途中このまま二人で海にと考えることもしばしばです。せめて妻を送ってから私が逝きたい、そう仏様に願う毎日です」ときっぱり語ってくれた。

土佐興四治
吉枝
拝

寺の動き

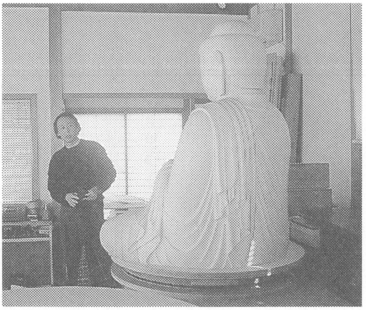
工事も仏像も順調に

役員で石川仏師を訪問

新本堂に安置する新しいお釈迦様と、四体の菩薩像の制作を、仏師の石川真水師にお願いしています。十二月四日、滋賀県甲南町にあるその工房を檀家役員十三名で表敬訪問して、制作工程を見学しました。

中型バスで巻・潟東のインターを朝七時に出発、北陸高速を走って午後二時過ぎ現地に到着。八割がた完成したお釈迦様像を間近に見ながら、仏像は割れないように、一本の木でなく何本かを寄せてさらに中をえぐって作る、等の説明を受けました。

十分に乾燥した最高級の尾州檜を使ったその美しい木肌、やすらぎを感じさせる全体像、なによりもその大きさに驚きました。ちょうど横綱級の相撲力士くらいでしょうか。二時間あまり滞在し、質問したり台座の高さや搬入方法が熱心に話し合われました。近くの公営宿舎に宿を取り、翌日は石川師が修復された仏像を二つのお寺を回って見学。陶器で知られた信楽で昼食を食べ、夜八時に戻りました。



「あんまり遠い所なんでためらったが、行って本当によかった。自分のお寺の仏様の制作過程なんて、二度と見れるものではないし、ま近で拝見したそのお姿があまりにすばらしくて感動した」とは、巻町の内藤喜作さんの言葉です。

順調な工事

順調な進捗で、年内には主要な工事が完成します。残りは内装仕上げの一部と仏具、電気器具、九十坪ある中庭の板張り、納屋の建設、排水路と造園です。

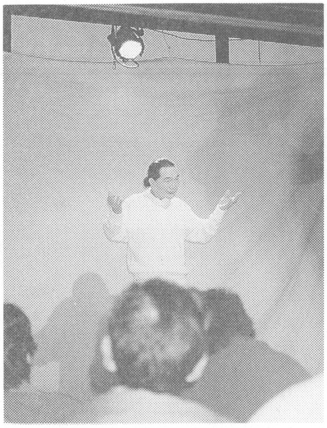
工事中の見学は危険防止上できませんが、年末年始は自由に内部まで入ってご覧いただけます。ぜひとも年始参りを兼ねてお出かけ下さい。その際は禁煙にご留意願います。

資金はまだ目標に到達していませんが、どうしても必要な追加工事を工事委員会で協議のうえ決定しました。詳細は次回に報告します。併せて会計中間報告、四月に予定している落慶法要の日取りその他もお知らせします。そのための総代・世話人会議を新年早々に開きます。

今年度分のご入金をお願いします。

お会式法要報告

日蓮聖人ご命日の法要を、十一月五日に営みました。六十名の方々が法要に参列、一緒になってお経を唱えました。長野県岡谷市の山本さんは、車の便が悪く前日から新潟市内に宿泊してお出かけ下さいました。



昼食後は都合で午後から参加の方、また地元で檀家以外の方も増えて百人余り。会場の広間が一杯になって、愚安亭遊佐（ぐあんていゆうざ）さんの一人芝居を楽しみました。来年五月の連休中の一夜、妙光寺の中庭で愚安亭さん新作の芝居を予定しています。

玄関に菊華を

今年も巻町の内藤清さんが、丹精込めて作られた菊華六鉢を玄関に飾ってくださいました。参拝の方々が足を止めて感心しながら眺めていました。

あんのんのページ

近況

夏に完成した安穏廟四基目ですが、早くも七十五件の申込になりました。問い合わせが途切れることなく続いてますので、満杯になるのも時間の問題です。一～三基目に若干の予備はありますが、それもなくなったらどうするか問題です。これ以上は対応ができなくなるので、基本的に五基目は考えていません。新本堂も完成しますので、これからは中身のより充実した寺にしていきたいという方針でいます。

今後は植栽などのさらなる周辺整備、もっと皆さんに足を運んでもらえる体制、生前に葬儀の段取りをつけて遺族の負担を軽くする、より安心な老後の生活、戒名を希望する方への一貫した対応、気軽にできる年忌法要等々の課題があり、検討していきます。

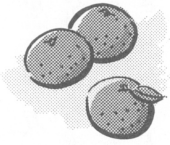
安穏廟はマスコミ報道で全国に知られるようになりました。こうした取材にご協力いただいた会員の方も多くいらっしゃいます。妙光寺ではどんな場合でも、必ず信頼できると判断した取材にしか応じていません。

ところが先般、大学院の研究目的ということで取材にきた女性に説明し、資料を提供したところ、断りなしで丸写しで本として出版されました。さらにフェスティバルでインタビューした会員のプライバシーまでが、無断で書かれました。出版社が学術研究団体の出版会の名称で、団体の理事には著名な学者が多数名を連ねています。

これに対して強く抗議して、先方の弁護士と再三協議の結果、本の回収廃棄絶版、著者と出版会からの謝罪文提出、理事会に報告して今後の再発防止に努める、という約束を取りました。

ここにご報告し、これからも十分配慮していきますので、引き続きのご協力をお願いします。

先日「今年最後の墓参りに来た」と言う方が寄ってくださり「妻の納骨に立ち会ってくれた親戚が皆、いいお墓だって言ってくれて本当にうれしかった。」そんな声をいただきました。



寺庭から

新世紀にむかって

小川　なぎさ

本堂工事のためか、なんとなく気忙しかった一年が終わろうとしています。私のような立場を「坊守」（ボウモリ）と、他宗派では言うそうですが、まさに言葉どうり。坊さんの坊なのか、〇〇坊というお寺の意味なのか。そして（モリ）とは、お寺を守る（まもる）のか、坊さんのお守り（おもり）なのか。うーん……。

あまり自分の時間がとれずに、お寺で過ごす時間がとても長かった年でした。だからと言ってせっせと掃除にはげんだわけでも無く、本堂がないぶん団体のお参りも少なかったのですが、いったい私はなにをやっていたのか。まさにお寺の留守番と、住職からいわれた雑用に明け暮れました。

忙しい住職とは、会話をする暇も減り、受けた電話を間違えないように伝えるのが精一杯。娘たちはそれぞれの時間を過ごしながら、自立しようとしているし、よい意味での孤独を感じました。開放された自由な時間は無いけれども、一人でもくもくと仕事をしていると、心がさわやかでした。

積極的に前向きにと、気持ちを変えると、どんなことも楽しいです。孤独が喜びを生み出すこともたくさんあります。家族の中で孤独を感じるということは、もしかしたら寂しいことなのかもしれません。でもそれが私にはとても心地好く、「人間一人で生きてゆく」という気持ちの距離間があれば、家族が思うとおりにやってくれなくても不満は無いし、自分の行動は自分で責任を持つ覚悟ができ、元気になれます。

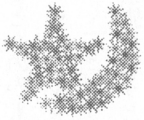
来年の抱負。坊守人生十七年。自然に仏さまの教えに近付いているのかどうか分かりませんが、少しづつ自然体で飾らない人生を歩み、どんなこともありのまま受け入れたいと思います。

それにしても、こうして新しい本堂の建設が順調に進んだ事は、このような景気低迷の時代にあっては凄い事です。集まる寄付の重みとそれぞれの心をずっと忘れずに、新しい本堂を受け継ぎたいものです。お寺はみんなのものです。

新しい世紀にふさわしく、開放的でとても美しい本堂です。除夜の晩には見学がてら鐘つきにおいで下さい。

すべてがいとおしく、ありがたく、感謝の気持ちで新しい年を迎えようと思います。

行事案内



お札配り

十二月に入り、来年のお札を持って各家にお経に伺っています。住職が新潟市内と巻、その他を鎌田が、とふたりで手分けしています。予定が立てにくく事前にお知らせできませんが、お電話いただければご都合をお聞きします。

大晦日　除夜の鐘

工事中ですが、例年通り大晦日夜十時半から除夜法要。引き続き十一時四十分ごろから除夜の鐘をつきます。どなたでも先着順に一回づつついて、そのあと縁起物が当る抽選があります。

古いお札などを燃す〝お焚き上げ〟もありますのでお持ち下さい。

元旦　年始参り

元旦の朝九時ころから午後四時ころまで、年始初参りの受付をしています。工事中の新本堂も内部まで見学できます。新世紀を妙光寺のお参りから始めましょう。

年回忌のお知らせ

平成十三年に年回忌のあるお宅へのお知らせは、持参か郵便で直接お届けしています。

「星祭り」祈願

来年一年の家内安全、健康、幸運を祈願する「星祭り」は一軒二千円です。新規の方のみ年内にお申し込みください。

あとがき

先日「ご前様は妙光寺をいつでも出ていくみたいなことを、言ったり書いたりしているが困る。あんたがいるから協力してるんで、他の住職ではだめだ」と相次いで言われました。最高にありがたい言葉で感謝しています。

もっと条件のいい寺に移りたい、なんてつもりは毛頭ありません。誰がいつ妙光寺の住職になっても、皆さんの協力をいただいてスムーズな運営ができる、そんな体制を作りたいというのが発言の趣旨です。ご理解ください。仏様の教えが優れ、先人の努力と皆さんの協力があってこそ妙光寺がずっと順調にきている、それを忘れたくありません。

いよいよ二十一世紀。難しい時代になりそうですが、いたわりのある社会であって欲しいと願います。

小川